

A ñ
é ß

STARTER STORY ・ JAPANESE ・ C2

うるう年の一句

うるう年の一句

皆川乙彦は、四十二年にわたって、市内の子ども俳句大会で審査員を務めてきた。

「季語のない句は俳句ではない」というのが彼の口癖で、その一言のために、これまで何百という句が、選から漏れてきた。

今年で八十一になる。医者からは、大会の審査を務めるのはこれが最後にしたほうがいいと、遠回しに告げられていた。心臓が、以前ほど言うことを聞かなくなっている。

会場は市民会館の小さなホールで、天井の高い部屋に、小学生たちの声が反響していた。長机の上には、選考漏れした句、佳作に残った句、そして特選候補の三枚だけが、皆川の前に並べられていた。

特選候補の一枚に、こう書かれていた。「なつやすみおわってせみがまだないてる」季語は「せみ」で夏である。だが大会は八月の終わりに開かれ、季節は暦のうえではすでに秋に踏み込んでいた。季重なりでこそないが、季節そのものが、ずれていた。

皆川は赤鉛筆を手にしたまま、しばらく動かなかった。字余りである。「なつやすみ」で五音を超え、五七五の型を、はみ出している。彼の四十二年は、こうした句を容赦なく落としてきた歴史でもあった。

選考記録には、そうした基準が几帳面に記されている。「型の逸脱は減点対象とする」「季語は当季を厳守すること」。皆川自身の筆跡で書かれた、いわば彼の憲法だった。

作者の名前を確認すると、三年生の女子だった。担当の教師によれば、夏休みの終わりぎりぎりになって、ようやく一句だけ提出してきたのだという。「うちの子、蝉が鳴きやむのを、ずっと待っていたみたいで」と、後日、母親が語ったという記録も添えられていた。

皆川の脳裏に、遠い記憶が浮かんできた。四十年ほど前、彼にも娘がいた。まだ小学生だった娘が、夏休みの最後の日に、蝉の声を数えながら泣いていたことがある。「もう鳴かなくなっちゃう」と。

その娘は、皆川が五十歳になる前に、病で亡くなった。以来、彼は夏の終わりが、ことのほか苦手になっていた。蝉の声が途切れる、あの数日間だけは、いまだに家の窓を開けずに過ごしている。

皆川は目の前の句を、もう一度声に出して読んでみた。「なつやすみおわってせみがまだないてゐる」型を外れ、季節も揺れている。だが、この句だけが、彼の耳の奥にある、ある夏の記憶と同じ音をたてていた。

審査員は他に三人いた。国語教師の乾、俳句結社の主宰である町田、そして皆川。乾は「型を守った句にこそ、特選を与えるべきだ」と主張した。町田は「型を破ってでも残る感情がある」と、珍しく皆川に賛同する側に回った。

乾がさらに言った。「先生がこれまで、どれだけ多くの字余りを落としてきたか、僕は覚えていますよ。ここで基準を曲げたら、これまで落とした子たちに、示しがつかないんじゃないですか」

それは正論だった。皆川自身が長年、そう子どもたちに教えてきたのだから。型を守ることは、感情を鍛える器を持つことだ、と。器のない感情は、ただの叫びに過ぎない、と。彼はそう信じて、四十二年を審査してきた。

だが、この句には器がなかった。あるいは、器を突き破って、あふれ出た感情だけがあった。皆川は赤鉛筆を置き、しばらく天井を見上げた。娘の泣き声が、蝉の声に重なって聞こえるような気がした。

「今年は、うるう年でしたね」と皆川は、脈絡もなく言った。乾と町田が怪訝な顔をした。「二月が一日多いだけで、暦は型からはみ出す。それでも誰も、うるう年を、間違った年とは呼ばない」

「この句も、同じかもしれません」皆川は静かに続けた。「型からはみ出した分だけ、余分に、何かを鳴かせている。私はこれを、特選にしたいと思います」乾は驚いた顔をしたが、それ以上は何も言わなかった。

表彰式で、女の子は少し恥ずかしそうにトロフィーを受け取った。「季語がずれているのに、どうして選ばれたんですか」と、司会者が皆川に尋ねた。彼は少し間を置いてから答えた。「季語は、暦ではなく、心の中にもあるからです」

会場を出るとき、皆川は久しぶりに、夏の終わりの空気を深く吸い込んだ。窓を閉め続けてきた四十年分の夏が、その一句によって、ようやく少しだけ、開かれたような気がした。

その年の冬、皆川は審査員を退いた。後任への引き継ぎ書には、規定に加えて、一行だけ手書きで書き添えられていた。「型を外れてなお鳴り続ける声には、特に耳を澄ませること」

翌年の大会にも、皆川は招かれて客席に座った。特選には選ばれなかったが、彼はプログラムの隅に、こっそり自分の句を一つ書きつけた。季語のない、五七五にすら収まらない句だった。誰にも見せるつもりのない、彼だけの一句だった。

OQOU STARTER LIBRARY

This story is from oqou's free starter library, graded at C2 for Japanese readers.

Read it interactively in the oqou app: tap any word for an instant translation, listen with natural narration, and carry your saved vocabulary into every story you read next.

oqou.app

[Download oqou on the App Store](#)

oqou •